活動報告

デンマークにおける特別学校（知的障害・自閉症）の役割
－ Brøndagerskolen 特別学校と Grydemoseskolen 併設 TeamV 特別学校の訪問調査から－
The Role of Special Schools for Students with Intellectual Disabilities / Autism in Denmark

石井　智也[1)]　田部　絢子[2)]　石川　衣紀[3)]　能田　昴[4)]　髙橋　智[5)]
Tomoya ISHII, Ayako TABE, Izumi ISHIKAWA, Subaru NOHDA, Satoru TAKAHASHI

1）日本福祉大学スポーツ科学部
Faculty of Sport Sciences, Nihon Fukushi University
2）金沢大学人間社会学域学校教育学類
School of Teacher Education, College of Human and Social Sciences, Kanazawa University
3）長崎大学教育学部
School of Education, Nagasaki University
4）尚絅学院大学心理・教育学群
College of Psychology and Education, Shokei Gakuin University
5）日本大学文理学部
College of Humanities and Sciences, Nihon University

1．はじめに

筆者ら「北欧福祉国家における子ども・若者の特別ケア」研究チーム（代表：髙橋智日本大学教授・東京学芸大学名誉教授）はこれまで，北欧福祉国家（スウェーデン，デンマーク，フィンランド，ノルウェー，アイスランド）の取り組みを事例に，多様な発達困難を有する子ども・若者の発達支援・特別ケアのあり方について調査・検討を行ってきた．

その一環として，2019 年 3 月にデンマークの知的障害・自閉症児を対象とする「Brøndagerskolen 特別学校」（アルバスルンド市）および「Grydemoseskolen 併設 TeamV 特別学校」（エスパゲーア市）に訪問調査を行った．

デンマークでは 2007 年の地方自治体改革によるアムト（県）の廃止，コムーネ（市）の再編も関わって，通常学級における障害等の多様な困難を持つ子どもの特別ケアの拡充（インクルーシブ教育）が図られてきたが，従来より教育実践の蓄積のある特別学校（Specialskole）や特別学級（Specialklass）においては専門スタッフの配置や特別学校間の連携が困難となるなど，障害の重い子どもの発達ニーズに応じた教育支援が困難となっていることが指摘されている（谷・青木：2017）．

こうしたなかで訪問調査を行った Brøndagerskolen 特別学校と Grydemoseskolen 併設 TeamV 特別学校は，限られたリソースのなかで周辺のコムーネ（市）の協働のもとに運営され，重度の知的障害・自閉症を有する子どもが安心して学ぶことができるような継続的発達支援に取り組んでいる．

それゆえに本稿では Brøndagerskolen 特別学校

と Grydemoseskolen 併設 TeamV 特別学校の取り組みを紹介しながら，インクルーシブ教育を推進するデンマークにおいて，特別学校（知的障害・自閉症）における重い障害を有する子どもへの発達支援の意義・役割はどのように理解・認識されているのかについて検討していく．

なお，Brøndagerskolen 特別学校と Grydemoseskolen 併設 TeamV 特別学校の調査協力者に対して，事前に文書にて「調査目的，調査結果の利用・発表方法，秘密保持と目的外使用禁止」について説明し，承認を得ている．

2. デンマークにおけるインクルーシブ教育促進と特別学校の役割

デンマークは 2007 年に地方自治体改革によってアムト（県）を廃止，コムーネ（市）を生活・教育の基本単位を再編した．この改革により県の管理下にあった特別学校が市の管理下に移管され，重度の障害をもつ子どもは市が管理・運営する特別学校に通うことになった．これ以降，特別ニーズを持つ子どものインクルーシブ教育への移行が取り組まれる．

2012 年にはインクルーシブ教育に関して新しい法律が定められて，通常学級において障害等の多様な困難を持つ子どもの教育が追究され，柔軟なグループやチーム編成，アシスタントの配置等により「特別な教育的サポート（Specialundervisning , specialpædagogisk bistand）」の拡充がめざされた．週 9 時間以上の特別教育を必要とする児童生徒のみが特別学校や特別学級での学習が認められることとなり，2015 年までに分離教育を受ける子どもの割合が 4%まで減少した．

デンマークでは現在もインクルーシブ教育の推進が推奨されているが，実際には「社会・情緒障害学校」「障害を持つ子どもの特別学校」への教育要求は強く，近年，就学児童生徒数は増加傾向にある．具体的には，国民学校（公立）の就学児童生徒数は 557,110 名（2015 年）から 532,060 名（2019 年）との減少傾向に対して，障害を持つ子どもの特別学校は 8,909 名から 9,998 名，社会・情緒障害学校は 2,528 名（2015 年）から 3,237 名（2019 年）と増加している（表 1）．

重い障害を有する子どもについては，子どもの発達課題や支援ニーズについての的確な把握が不可欠であり，専門性の高い教職員，豊富なリソースが備わっている特別学校が求められているのである．

重い障害をもつ子どもにおいては，家庭問題の深刻化や不適切な養育（養育負担が大きく離婚に至ることや虐待・ネグレクト等の問題が生じていること）によって，彼等の安心・安全な生活や発達が保

表 1　初等中等教育段階の学校種別就学児童生徒数（人）

	2015 年	2016 年	2017 年	2018 年	2019 年
寄宿制学校	28,858	28,635	29,087	29,425	30,373
国民学校（公立）	557,110	555,618	549,064	541,198	532,060
国民学校（私立）	116,093	119,239	121,483	122,029	122,425
自治体寄宿制学校	4,786	4,760	4,040	3,842	3,698
障害を持つ子どもの特別学校	8,909	8,914	9,192	9,454	9,998
社会・情緒障害学校	2,528	2,525	2,681	3,029	3,237
他の学校	616	462	1117	1,099	1239
合計	718,900	720,153	716,664	710,076	703,030

（Statistics Denmark HP：https://www.dst.dk/en/Statistik/emner/uddannelse-og-viden/fuldtidsuddannelser/grundskole）

障されないことも少なくない．こうした実態から，デンマークでは「デイケア・サービス」「コンタクトパーソン」「カウンセリング」などの家庭サービスとともに，「養護施設（dø gninstitution）」における特別ケアの一環として，重度の知的障害・自閉症等の子ども・若者の居住施設におけるケアが取り入れられるなど，多様な生活ケアと発達支援がなされている（髙橋ら：2020）．

3.「Brøndagerskolen」特別学校の取り組み

Brøndagerskolen 特別学校はアルバスルンド市やコペンハーゲン市を中心とした 19 の周辺自治体（コムーネ）により運営されており，それぞれの自治体（コムーネ）から知的障害・自閉症の子どもが通学している．

Brøndagerskolen 特別学校は 17 クラスで編制され，0 年生～ 10 年生まで 90 ～ 100 名が就学している．1 クラスあたり 4 ～ 7 名の子どもが在籍しているが，暦年齢に加え「仲間としての相性」を加味してクラス編制が行われている（写真 1）．

写真１　教室内の様子

知的障害・自閉症を有する子どもが全体の 85％を占めており，残りの 15％の子どもは確定的な診断はないものの自閉症と同様の発達困難を抱えていたり，発達に遅れがある子どもである．知的発達のレベルは 1 歳半程度から卒業試験が受けられる程度まで多様であるが，比較的重い障害の子どもが多く在籍している．

スタッフは教師約 40 名，ペタゴー（学習生活指導員：Pedagoguages）約 40 名，アシスタント約 25 名から構成されているほか，教育カウンセラー・保健師・「青少年教育顧問」とも連携が図られている．また，子どもが抱える教育課題の解決策を探ることを目的として，心理士・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士等で構成されるスペシャルチーム（ガイドチーム）が編成されている．保護者との協働も重視しており，最低でも年 4 回の面談が行われている．

訪問調査・インタビューのなかで，保護者の仕事の関係で朝 7 時台に登校せざるを得ない 15 名の子どもに対して，ペタゴーが教育支援にあたるという事例が挙げられた．従来のように学校教育（教師）を主体とし，登校前・放課後の対応（ペタゴー）を追加するというような視点ではなく，教師とペタゴーの協働によって，子どもの生活と発達に応じた丁寧な発達支援が目ざされている．

毎年，自治体（コムーネ）のケースワーカーも加わって，子ども一人ひとりの年間カリキュラムを立て，子どもが学校で快適に過ごしているのか，成長・発達が保障されているのかどうかを評価し，それを踏まえて教育支援の改善が試みられている．例えば，子どもの有する「感覚過敏」についても作業療法士が一人ひとり丁寧にアセスメントを行いながら，それに基づいて教育支援がなされている．あるいは「食の困難」がある場合には，まずは食べられるものを食べてもらいながら（「もさもさ」した触感のデンマーク伝統の黒パンを嫌がる子どもには白パンを提供する等），徐々に望ましい方向に発達するように対応している．また，感覚統合的なアプローチを通して安心感を得ることができるように，スヌーズレンやボールプール等も学校内に設置されていた（写真 2）．

教育上特に重視している視点として「子どもがどの方向に向かって発達しようとしているのかを見極めてサポートを行うこと」と「卒業後の社会生活を見据えた支援」が挙げられた．保護者と相談を重ねながら「子どもが何をしたいのか」「何を必要としているのか」を把握して，卒業後を見越した成長・

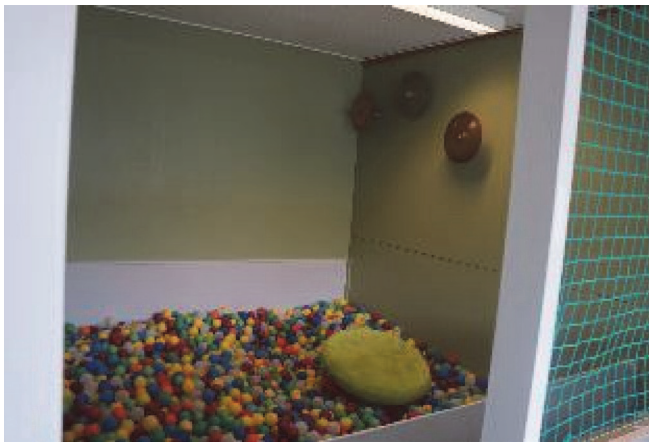

写真２　校内に設置されているボールプール

発達を支援することが強調されていた．

10 年生で卒業した後は STU という教育機関に通うことが多く，職業訓練を通して就労支援が行われる．STU とは知的障害・発達障害等を理由に高校あるいは職業訓練校等に進学できなかった子ども・若者のための３年間の教育機関であり，デンマークの特徴的な取り組みである．対象は義務教育を終えた 16 歳～ 25 歳の「発達障害などの特別なニーズのある若者」であり，とくに障害種別等の制限は設けられていない（池田：2018）．様々なプログラムを通じて職業訓練を行い，社会性を身につけて自立を促すためのものとして位置づけられている（黒田：2016）．

Brøndagerskolen 特別学校には長期休暇に関して特徴的な教育的方針がある．長期休暇によって子どもの発達が停滞することを防ぎ，子どもの心身の安定と家庭の生活支援のため，あえて長期休暇を設けていない．Brøndagerskolen 特別学校は長期休暇を設けていないが，しかし教師は４週間の長期休暇を取得することができ，ペタゴーやアシスタントもそれぞれのタイミングで休暇を取得できる．

なぜならば１クラスを教師・ペタゴー・アシスタントの三者で担当しているため，休みを取っても維持できる体制が整備されていた．学校運営の観点からは複雑な休暇調整は負担となるものの，1994 年からこのシテステムが実施されてきた．近年のデンマーク社会では親の離婚等を含め家庭環境の変化が急激であるために，子どもにとって安心できる場の確保が最優先で取り組まれているのである．

4. Grydemoseskolen 併設 TeamV 特別学校の取り組み

Grydemoseskolen はエスパゲーア市にある４つの国民学校のうち 1980 年に建設された学校である．Grydemoseskolen 国民学校に併設されている Team V 特別学校はエスパゲーア市を含めた３つの自治体（コムーネ）が協働して運営している知的障害・自閉症の子どもの特別学校である．総勢 430 名の子どもが学んでおり，敷地内には通常学校（Grydemoskolen Team Ⅰ～Ⅲ）と特別学校（Grydemoskolen TeamV）がある（写真 3）．

TeamV 特別学校には６～ 16 歳（0 ～ 10 学年）までの子ども 75 名が在籍しており，多くは知的障害・自閉症を有しており，重度重複障害を有している子どもも少なくない．子どもたちは歴年齢と機能レベルの発達に応じて８クラスに分けられ，各クラスでは「仲間になれるかどうか」を重視し，３名ほどのグループに分かれて活動を行う．

訪問調査時においてスタッフは約 70 名おり，教師 17 名，ペタゴー 17 名，アシスタント 20 名，言語聴覚士３名，理学療法士２名，作業療法士２名，その他にソーシャル・ヘルス・アシスタント数名で構成されている．

写真３　Grydemoseskolen と TeamV 特別学校の校舎

複数の教師が，同じ敷地内において通常学校と特別学校のチームが存在することによって「学校内に

多様な子どもがいる環境が保障されること」「それぞれの子どもたちが安心して学べる場所があること」が保障されていると語り，また普段から仮装パーティーや子どもたちによる催し物を行って交流をはかっているが，そうした交流を通して「お互いの姿を鏡のように映し合いながら学ぶことができる学校」とも表現した．

通常学校の Team Ⅰ～Ⅲにも軽度の知的障害・発達障害等を有する子どもが複数在籍しており，0 クラスという特別学級に通っている．TeamV 特別学校の子どもたちは特別幼稚園・保育園から入学してくる者がほとんどで，入学前に特別幼稚園・保育園の担当者，セラピスト，保護者とともに学校で数時間を過ごし，0 クラスも含めて見学を行ってから入学の決定がなされるなど，特別幼稚園・保育園との連携が重視されていた．

一日の流れとして，早朝 6 時半からの登校を受け入れており，始業までの時間帯はペタゴーとアシスタントのもとで活動を行うことができる．帰りは子どもの実態に応じて３種類の時間帯のバスに乗車して帰宅する．

TeamV 特別学校では教育と余暇支援を含む包括的教育サービスがめざされている．国民学校法に定められた教科教育も子どもにとって意味のある範囲で実施し，また同校の子どもは種々の発達困難を併せ持っていることから日常生活動作や五感を刺激し身体の感覚を高める感覚統合の発達支援も行われている．

写真４　子どもが安心して活動できる学習空間

発語困難等の重度障害の子どもが在籍しているクラスでは視線等で意思表示を促すコミュニケーション代替手段が用いられており，意思伝達装置用ソフト「Tobii Communicator」を用いた視線による文字入力も可能なタッチ PC が活用されている．すべての教室には電子黒板が設置されており，ICT による支援が導入されている（写真 5）．

写真５　教室内の様子

デンマーク社会では衣食住から仕事・生き方まで「自ら選択し決定すること」が重視されている．小さなことでも日々，子どもが選択と決定を積みかさねていくことがアイデンティティ形成に繋がり，人生にも大きな影響を与えるものと捉えられているために，TeamV 特別学校においても「自ら選択し決定すること」が重視されている．

子どもの学習目標の設定と評価は，保護者・教

写真６　子どもの発達に応じた教材開発

師・ペタゴー・セラピスト等が協力して取り組んでいる．保護者との連携を緊密なものにするため，各家庭には iPad が 1 台配布されており，アプリ（Moment Diary）を連絡帳として活用し，写真を含めその日の様子などの情報交換を行っている．チームで設定した目標は，年に一度見直し，保護者との面談を行いながら再評価している．

卒業後は STU を選択する子どもが多い．STU の年限は最長 3 年間であるが，TeamV 特別学校に在籍している子どもは 2 年間のプログラムを選択することが少なくない．8 ～ 9 年生になると卒業後を見据えた取り組みが始まり，STU の担当者とともに移行支援の準備がなされる．

さて冒頭でも述べたように，デンマークではインクルーシブ教育への移行により，特別学校・特別学級は通常学校への統合ないし廃止の傾向にある．しかし，十分な受け入れ態勢が未整備なまま行われたインクルーシブ教育への転換は，子どもたちに各種の発達困難をもたらし，教師の疲弊も深刻化している．それゆえに TeamV 特別学校の専門家チームは，通常学校に在籍する軽度知的障害・発達障害等を有する子どもの支援にまわることもあり，近隣地域の学校から研修講師・スーパーバイザーとして招聘されることも多い．

TeamV 特別学校で重度障害児を担当する教師は，重度重複障害の子どもの特別教育・発達支援を通常学校で行うことは極めて困難であると語り，しかし，デンマーク政府は政策を間違えたと判断した時にはそれを認めて修正・方向転換する姿勢があるので，修正・方向転換の期待も述べた．

5. おわりに

本稿では，デンマークの知的障害・自閉症を対象とする特別学校の取り組みを紹介しながら，インクルーシブ教育を推進するデンマークにおいて，特別学校（知的障害・自閉症）における重い障害を有する子どもへの発達支援の意義・役割はどのように理解・認識されているのかについて検討してきた．

Brøndagerskolen 特別学校では，アルバスルンド市を中心とした周辺の 19 の自治体（コムーネ）が共同で資金拠出を実施することを通して，知的障害・自閉症等の障害の重い子どもへの発達支援が実施されてきた．とくに教師とペタゴー・心理士・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・栄養士など多様な領域の専門家との協働，子どもの有する感覚過敏や食の困難等の発達困難のアセスメント，長期休暇中における特別ケアの継続などの教育支援が実施されており，知的障害・自閉症等の障害の重い子どもの成長・発達において，こうした取り組みが不可欠であることも示された．

Grydemoseskolen 併設 TeamV 特別学校では，同じ敷地内において通常学校と特別学校のチームが存在することによって「学校内に多様な子どもがいる環境が保障されること」「それぞれの子どもたちが安心して学べる場所があること」の重要性が子ども・保護者・教職員間で認められ，また Team V 特別学校の専門家チームが通常学校に在籍する軽度知的障害・発達障害等を有する子どもの支援や教職員への研修・スーパーバイズを行うなど，地域においても特別学校に対するニーズはとても高いことが明らかとなった．

言語的，文化的，身体的なマイノリティを持つ市民のソーシャルインクルージョン（社会的包摂）実現の方法としてのインクルーシブ教育を推進するデンマークであるが，特別学校の維持や特別教育リソースの整備充実等において困難を抱えており，インクルーシブ教育促進のなかで障害の重い子どもの発達困難・支援ニーズに応じた発達支援をどのように深化させていくのかが大きな課題として示された．

文献等

Børne- og Undervisningsministeriet HP：https://www.uvm.dk/

Brøndagerskolen HP：http://broendager.skoleporten.dk/sp

Grydemoseskolen HP：http://espergaerdeskole.dk/grydemoseskolen/

池田法子（2018）デンマークにおける特別なニーズのある若者教育政策の展開―特別計画若者教育（STU）を中心に―，『京都大学大学院教育学研究科紀要』第 64 号，pp.29-41.

黒田学（2016）『ヨーロッパのインクルーシブ教育と福祉の課題』クリエイツかもがわ.

Statistics Denmark HP：https://www.dst.dk/en/Statistik/emner/uddannelse-og-viden/fuldtidsuddannelser/grundskole

田部絢子・石川衣紀・内藤千尋・髙橋智（2019）北欧における特別学校と障害の重い子どもへの取り組み―スウェーデン・デンマークへの訪問調査を通して―，『東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅰ』第 70 集，pp.235-246.

髙橋智・田部絢子（2018）デンマークの重度障害特別学校の実践―北欧における子ども・若者の特別ケアの動向⑪―，『内外教育』第 6656 号，時事通信社.

髙橋智・石井智也・田部絢子・石川衣紀・能田昴・内藤千尋（2020）デンマークにおける重度障害の子ども・若者の生活ケアと発達支援―コペンハーゲンの重度障害居住施設「障害児センター・白鳥の家」の訪問調査から―，『東京学芸大学紀要総合教育科学系』第 71 集，pp.149-159.

谷雅泰・青木真理編著（2017）『転換期と向き合うデンマークの教育』ひとなる書房.